私の紡いだ「言の葉」たち

表題は阪牧吉次『塵芥抄』風土舎、2013 年 4 月の副題である。「まえがき」から

― 私は、「風」にも「土」にもなり切れませんでした。風が吹くとなびき、風が吹かない時は土の上を右往左往する「塵・芥」の類です。この本の書名を「塵芥抄」としたのは、塵芥が紡いだ言の葉の断片集であるからにほかなりません。

本書は次の 7 章からなる 581 ページの大著。第 1 章 学びの原点を顧みる（今日に至る学びの原点として、幼い頃の思い出と何と言っても私の生きる力の源泉となった卒業論文及びこれにまつわる話） 第 2 章 仕事に取り組む（須坂市職員としての仕事に取り組みながら書いたもの） 第 3 章 生活の中で考える（主には信濃毎日新聞「建設標」に投稿したもの） 第 4 章 本を読む（野上弥生子著「森」についての感想文と初期の頃の「読書会だより」） 第 5 章 地域を創る（住んでいる亀倉町の地域活動の中で書いたもの） 第 6 章 地域史を探る（自分のライフワークとも言うべき地域史の分野で書いたもの） 第 7 章 育ててくれた人たちを想う

「あとがき」に印象に残ることが書かれている。 ― 現在、私は林住期（仕事を離れ、俗世間から一定の距離を置き、みずからの生き甲斐を求めて生き、人生を開花させる時期）を生き始めたところにいることは間違いありません。どのように生きるかが課題です。健康でなければ何事も始まりませんので、まず健康に留意することにします。そして、自然に逆らわず、晴れた日は外へ出て畑仕事をし、雨の日は家の中で本を読むことにします。畑仕事は、自然と調和し健康で暮らせるためにし、本は、新しいものというよりは、これまで読んだ本の再読や読もうと思って買って書棚に眠っている本をゆっくりと味わいながら読むことにします。これまで長い間、「〇〇のため」という必要によって生きてきたのですから、これからは我儘に生きたいと思います。我儘というと悪い意味にとられやすいのですが、あり余る時間を自分のために使って生きるということです。こんな贅沢はありません。その中で人生についていくらかでも考え開花させることができるとすれば、これほど幸せなことはありません。

なんだか現在の私に対する「メッセージ」のような言葉だ。「林住期」3 年目の私にとって、どう生きるかを悩み、苦しんできたことでもある。

本書最後に、カバーのイラストを提供してくれた長男・博和と、執筆・校正にあたり、「晴耕雨読」のみならず「晴読雨読」になりやすかった私を温かく見守り励ましてくれた妻・三千子に感謝します、と書かれている。そんな著者・阪牧吉次さんが、この 10 月「永眠した」という、「喪中の知らせ」を奥さまからもらった。驚くばかりで涙する。あまりに悲しすぎる。 （2016 年 11 月 25 日）